OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床の知としてのフィールドワーク : 文化人類学のリアリズムを再考する
Author(s)	高橋, 巌根
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 129-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床の知としてのフィールドワーク

――文化人類学のリアリズムを再考する――

高橋　巌根

〈要旨〉

文化人類学が現在抱えている問題の一つに「民族誌的リアリズム」への疑問がある。近年の議論の流れでは、これを否定し別の方法（とくに解釈学的方法）によっておきかえようとする方向へ傾きつつある。だが、そうした試みが始まったのはそう最近のことでないにもかかわらず、リアリズムの否定は不徹底に終わっている。筆者の主張は、確かにいわゆる「民族誌的リアリズム」を維持し続けることはもはや不可能だが、リアリズムそのものを否定するのではなく、それを少なくとも次の2つの条件と照らし合わせて〈更新〉していくことにある。その二つの条件とは、文化人類学以外のマクロレベルの考察を主とする社会科学に残りつづけている近代主義的枠組みの中での民族誌の位置づけの問題と、リアリズムを肯定しながらその成立根拠を問う「倒錯的戦略」（蓮見重彦）である。

キーワード

臨床の知、近代主義的枠組み、民族誌的リアリズム、倒錯的戦略、リアリズムの〈更新〉

今日、文化人類学は危機的状況にあると言われている。危機の兆候としてはさまざまな側面が指摘されているが、その一つにフィールドワークという方法に対する懐疑がある。フィールドワークで一人（ないし通常は少数）の研究者が把握できるような小規模な社会の詳細な描写が、一体何になるというのか？かつては、この方法で専門家以外の一般読者をもあっと言わせるような「発見」ができたかもしれないが、今ではすっかりマンネリズムに陥ってしまっている。さらに、今日の世界で急速に進行しているグローバリゼーションとの関連をどのようにして説明するのか？このような疑問は決してごく最近のものではないが、文化人類学者はいまだそれに対して有効な答えを見いだせないままでいる。

確かにポストモダニストと呼ばれる文化人類学者たちが、マリノフスキーの時代以来、文化人類学者の現地調査を支えてきたパラダイムの一角をなす「民族誌的リアリズム」を批判していることはよく知られている。後にとりあげるように、こうした立場をさらに徹底させて、そのようなリアリズムの完全放棄を訴える論者もいる［杉島　一九九五］。しかし筆者は、リアリズムの放棄は文化人類学じたいの自己否定につながると考える立場をとる。必要なのは、リアリズムを放逐することではなく、わたしたちが採用してきたリアリズムのどこに問題があったのかを捉え、それをどのように更新していけばよいのかを探ることである。筆者は、杉島氏がとるような、リアリズムを単一のものとし、それを反リアリズムと対立的に捉えたうえで否定するという論法は有効ではないと考える。むしろ、リアリズムをいったん肯定し、その成立根拠を問い続けるという形をとるべきであると考えるのである。

リアリズム再考のための〈臨床の知〉

文化人類学の新しいリアリズムを模索するうえで、筆者が拠り所としたいと考えているのが、哲学者中村雄二郎が提起した〈臨床の知〉の思想である。この思想を簡潔に述べた氏の著書『臨床の知とは何か』じたいは新書版ということもあり、哲学の専門的な領域での新しい知見を述べたものではないが、氏が哲学者としての経歴を通じて追求してきたさまざまなテーマが〈臨床の知〉という単一の概念によって統一的に論じられている点で重要な著作であると言うことができる。〈臨床の知〉が新しいリアリズムにとっての出発点となることを象徴的に示す箇所が、まさにこの書の冒頭にある。それは、チェーホフの小説『手帖』の一節が引かれている箇所である。

《ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々は、ちょうどいい機会とばかり、てんでに自慢をするやら、褒め合いをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃になって人々が気がついてみると－当の主人公を招くのを忘れていた。》［中村　一九九二：二］

ここで、「集まった人々」を既成の理論や学問、「招かれなかった主

人公」を〈現実〉であるとすると、チェーホフのこの短編は両者の間のずれを見事に表現したものとして読めるのではないかと示唆する。話を文化人類学にこと寄せてみれば、構造主義、ネオ・マルクシズム、経済人類学、医療人類学、最近では「実験的民族誌」と呼ばれる試みなどのように、この学問の中では流行と言ってよいくらいに次から次へと新たな理論や分野が登場するけれども、にもかかわらず、〈現実〉を研究の場に必ずしもうまく招き入れることができなかったのではないか、そして、冒頭に述べたように、このことが文化人類学の今日の「危機」と言われているものと密接な関係があるのではないかと考えられるのである。

もっとも各種の思想、いくつもの思考の試みを〈現実〉の解明に収斂させていくことは、文化人類学では実は決して新しいことではないかもしれない。マリノフスキーが『呪術・科学・宗教』[Malinowski 1954（一九四八）]やその他の民族誌の中で、未開人の「生」という言葉を使うとき、どのようにしたら観念や単なる表象によってそれを見失わないようにできるのかという問題意識があると推察されるのである。

次に、ここで〈現実〉という呼び名で呼ばれているものは一体何のことなのだろうか。通常、文化人類学を含めた人間諸科学の危機が叫ばれるとき、よく問題にされるのは「人間の喪失」というテーマである。ごく最近にも、この学問を対象とする学会で焦眉の課題となっている「学会名称変更問題」に関して、中村光男氏は「危機を克服するための道は人類学における人間の復活にあ」るとしているし［日本民族学会　一九九五：五三］、河合隼雄氏は心理療法家を対象としたブックガイドの最後の章で『臨床の知とは何か』を人間理解の新しいパラダイムとして紹介してこのパラダイムの大切さを伝える努力が必要であると結んでいる［河合　一九九三］。

中村雄二郎氏が言う〈現実〉を単純に「人間」のことであるとしてもよいのかもしれないが、フーコーを引き合いに出すまでもなく「人間」というのはいまや十分プロブレマティックな概念であるから、本職の哲学者としての氏はこの言葉を避ける。そして、その代わりに大ざっぱに言って、〈現実〉とは第一に〈生命現象〉であり、第二に対象との〈関係の相互性〉（あるいは相手との交流）のことであるとしている［中村　一九九二：五］。そして、この二つは互いに結びついている。しかし、文化人類学の立場からは前者よりも後者がより重要であると言えるので、以下の議論では〈相互性〉の問題に絞って論述していくことにしたい。

『臨床の知とは何か』に登場するさまざまな理論の中で、文化人類学のフィールドワークともっとも関係が深いと思われるのは、第Ⅱ章の〈経験〉と〈実践〉についての議論であろう。ここでは、氏の言う〈現実〉の第二、関係の相互性が重視されている。中村氏は経験が経験となるために必要な条件として三点を挙げているが、そのうちの二点が相互性と関連している。そのうちの一つは自己が何かの出来事に出会って〈能動的に〉振る舞うということであり、いま一つはその行為の結果として返ってくる〈他者からの働きかけを受けとめながら〉振る舞うということである。しかし、ここで気を

つけなければならないのは、こうした能動性や受動性、その双方の弁証法的関係をただ単に形式的・論理的なものと捉えるのではなく、生身の〈活動する身体〉をそなえた主体がおこなう相互行為として考えるべきであるということである。しかも、その場合の身体は精神／身体の二元論の中の一方の項のことではなく、《精神とは活動する身体である》という意味で精神と不可分なものとしての身体を指すのである。精神が身体の活動と切り離されたところに抽象的に存在するわけではないのと同時に、身体が生きているというのはそこに精神が存在しているということにほかならない。とすれば、関係の相互性にとって活動する主体の身体性を考慮することが不可欠であることがわかるのだが、まさにこれが氏の言う相互性の第三の条件なのである。

身体性の重視という観点を文化人類学者のフィールドワークに即して考えてみれば、フィールドノーツや民族誌をまとめるというめんどうな作業じたいにフィールドワーカーの身体性が賭けられているということができよう。文化人類学や社会学など社会科学のフィールドワークに関する入門書、その名も『フィールドワーク』の著者、佐藤郁哉氏もこの書の中の「フィールドノーツ」についての項でこの点を強調している［佐藤　一九九二：一八〇－一八五］。佐藤氏によれば、フィールドワーカーが異なる文化の現場でのカルチャーショック体験はフィールドノーツ（なかでもとりわけ、一日ないし数日にわたる出来事の観察やそれに対する考察をまとめ清書した記録）を書くときに起こる。そして、そのようなフィールドノーツをまとめる際には、網羅的な記録を目指すということが肝心な点である。もちろん「網羅的」と言っても何から何まで書けばいいというものではなく、いくつかの狙いがある。それを順に列挙すると、①自分が関心をもっている問題ではないことに関わる出来事をも拾い上げ、自分の仮説に都合の悪い知見を無視することのないようにする。②ついつい目が向かいがちな、いわゆるエキゾチックな風俗やショッキングな出来事ではない、ごく当たり前に思える出来事をも漏らさない。①と②は、後で実はそのときは考えもしなかったような出来事が重要であるとわかったような場合、あいまいな記憶に頼らずに出来事を再生することを可能にするための処置である。③フィールドの文化や慣習に対する過度の慣れによって起こる感覚の鈍化を防ぐ。このような条件を満たすためのフィールドノーツの作成は、自分の慣れ親しんだ土地ではない異質な環境下にあってただでさえ消耗しやすいフィールドワーカーの疲労を倍増させかねない要因となる。書き進めていけば、思い出したくないような不愉快な出来事や自分が犯した手痛い失敗を蒸し返し再体験することも避けて通るわけにはいかない。つまり、記録をとるということが、出来事の結果を冷静に分析的に書き留めるという理性的な作業であるばかりではなく、自分の身体や感情を媒介にすることによって初めて成立する営みであることが、ここでも重視されている。

しかし、上の条件を満たしながら「網羅的」に記述を蓄積したとしても、その量が一人の人間に可能な範囲を上回ってしまうことは大いにあり得る。その場合に、何がそれを回避するための基準とし

て働いたのだろうか？これまでの文化人類学では、文化の枠組みという保証や全体性という前提がそうならないように個々の研究者を支えていた。だが、近年度々指摘されるように、そのような文化概念が現実性を欠いた一つのフィクションにしかすぎず、社会科学あるいは経験科学の概念としてはあまり適切とは言えなくなってきたのではないかという問題提起を踏まえれば、このことはもはや文化人類学の問題でないとは言えない。（念のために記しておくが、文化概念がフィクションなのが問題なのではなく、そのフィクションが現実との結びつきを欠いていることが問題なのである。）

そこで、フィールドワーカーの身体的な経験や実践に対して、〈限定〉［註参照］と並んで、〈決断〉・〈選択〉が決定的要素となって現れてくる。これが、中村氏が相互性に対して与えるいわば但し書きなのである。それは決して、相互の関係の中に依存やあいまいさといった要素を持ち込むことを意図していない。むしろ、主体と対象（行為の相手や世界）の間に起こる作用が双方向的であるだけに、主体の能動的な行為の結果が対象を通して主体の身体に跳ね返る形で、主体は〈受苦〉を甘受しなければならない。それは、単純に精神的な苦悩ばかりではなく、精神＝身体の全体にしみわたる感覚である。

［註］ここでは、〈限定〉は2つの意味で使われている。一つは、経験による自己の限定である。通常、私たちは、自己という主体が経験するものと考えがちだが、経験が蓄積されることによって自己がしだいに形成されていくという側面も理論の中に含めるべきであるということ。いま一つは、空間的・時間的な限定で、別の言いかたをすれば〈トポスの知〉とも呼べるだろう。私たちのしている行為や世界で起きている出来事が、それが起きている場所や時と無関係に起きるわけではなく、その双方ないしどちらかと密接に関わっているということ。）

ここで注目しておきたいのは、こうした知のありかたが理論的一般化を旨とする近代科学やそれに影響を受けた学問の方法とは対極にたつ方法にほかならないという点である。もちろん〈臨床の知〉自体がそうした性格を帯びているのだが、この知の形態をこの文脈の中で限定すれば、それは〈トピカ〉の知と呼べる知の系譜である。これはアリストテレスの『トピカ』などの古代ギリシア哲学に始まり、キケロを経由し、近代ではヴィーコがその代表的な論者である。ある事例、あるトピックは、論理的に整序された議論や体系的に組織された技術を用いて扱うことはできない。そうした論理や体系からすり抜けてしまうもの、それに対して西欧の哲学は〈賢慮〉（フロネーシス［ギリシア語］、プルーデンティア［ラテン語］）を用いるのだとしてきた。だが、筆者は哲学を専攻する者ではないので深入りするのは避け、ここではこうした知の潮流に着目する理由だけは挙げておくことにしよう。

それは、この思想の流れが完全には近代西欧の外部に位置しない（つまり、その内部に留まっている）という状態にありながらも、近代西欧思想の主流とは異なる系譜を形成している点にある。ここに、この思想が未開による文明への批判という従来からの定形的パ

ターンを脱した批判力を持つ可能性があるように思われるのである。そうでなければ、代わりに「厚い記述」などのギアツの思想をとりあげて論じてもよかったはずであり、その方が文化人類学を専攻する者にとってよりふさわしいと言えるのかもしれない。しかし、ギアツに対する次のような批判があることを念頭に置く限り、ここにギアツを論じるのは適切ではない。青木保氏は『ローカル・ノレッジ』の邦訳の解説の中で、「ギアツの方法の可能性と限界」としてローカル・ノレッジ（「地方の知」という〈トポスの知〉）の理解と近代主義的人文・社会科学の大問題との結びつけの困難について言及している［ギアーツ　一九九一：四一九－四二〇］。しかし、ギアツ自身がそうした困難を自分（あるいは自分たち文化人類学者）の問題としているかどうかは疑わしい。と言うのは、『ヌガラ』の日本語版序文には次のようなことが述べられているからである。

「人類学的著作は、小さな問題の研究によって大きな問題に光を当てようとすることが多い。この村、あの部族の研究によって、民族全体、国家全体について語ろうとする。特定の位階制、特定の農業システム、特定の信仰パターン、特定の権力体系の研究によって、あらゆる位階制や農業や宗教や政治、その一般について語ろうとする。しかしその語り口は間接的で不明瞭で頼りなく、遠回しな指摘にとどまることが多い。読者が直接の理解対象としようとするものが何であれ、ある著作の語ることがその対象にどのようなかたちでどれほどまで関わるかの判断は、読者に委ねられている。一般化の可能性は、眺める側にあるのである。」［ギアツ　一九九〇：iii］

もちろん、文化人類学者が「眺める側」になってもよいのだが、それは文化人類学者の責務ではない。だから、してもしなくてもよいし、そうすることは伝統的な文化人類学の範囲を越えると言ってよい。さらに、青木氏も触れているように、ギアツは別の箇所でレビ＝ストロースの「決定論」的な知の枠組みを退けようとする［Geertz 1973：三四五－三五九］。しかし、まさにこの点が青木氏の論評の最も肝心なところなのだが、ヘルムスによるバリの王の葬儀の描写［ギアツ　一九九〇：一一五－一一九］の例のように、民族誌的記述がある意味で西欧から見た異文化に対するエキゾティシズムの域を出ないとすれば、ローカル・ノレッジも結局は欧米的な近代主義の中に還元することによってしか意味をなさないことになる。

これは一人ギアツの限界ではなく、多かれ少なかれ一九八〇年代以降の文化人類学自体が抱えた問題でもある。だが、青木氏が周到に言葉を選んで表現したように、これは限界であると同時に可能性でもある。それはつまり、ギアツが到達した地点を踏まえることによって、その先を展望する余地がまだ残されているのではないかということである。（残念ながら現状では、ギアツはアメリカの人文・社会科学者の中では「全くのマイノリティ」であるそうだし、さらに日本では、青木氏によれば「ギアーツの著作を理解する教養と知性を備えた者はまずほとんどこの学会（文化人類学）にはいない

といってよい」そうである［ギアーツ　一九九一：四一三－四一五］。仮のこの言葉にいくぶんかの誇張が含まれていたとしても、確実に言えることは今のままではギアツを踏まえた「ギアツ後」など問題意識にのぼりようもないということである。）

〈臨床の知〉で、〈選択〉や〈決断〉を重視するというとき、その行為をフィールドワーカーの身体を通して行うミクロレベルの条件と同時に、近代主義的で決定論的な枠組みにどのようにして関わるべきかというマクロレベルの条件があることも忘れてはならないのである。

リアリズムの放逐か、更新か

杉島敬志氏は、最近の論文集『民族誌の現在』の中の論文で、J・クリフォードらのポストモダニスト人類学の議論を踏まえながら、これからの文化人類学は従来の「民族誌には異文化の現実が正確にしかも全体的に表象されている」［合田・大塚　一九九五：二〇〇］民族誌的リアリズムを放逐すべきであると主張している。なぜリアリズムが放逐されなければならないのかと言えば、それは周知のように、民族誌を書くという作業を独占する文化人類学者が住民の声を代弁することによって支配し圧倒することになるという非対称的な関係を避けるためである。こうした文化人類学者の権威をクリフォードは「単声的」であると言うのだが、この単声的権威を否定するということは実は杉島氏が考えるほど簡単なことではない。

杉島氏によれば、リアリズムの放逐は「民族誌的研究にパラダイムの喪失状態をもたらす」［合田・大塚　一九九五：二〇八］と言う。このことは、このパラダイムを拠り所として研究を続けてきた人類学者の共同体を一時的にせよ大きく揺るがし、その結果この共同体は民族誌的研究の正当性を保証できなくなってしまう。そうなると、「私たちはその目的や理由を自分のおかれている社会的状況との関連で問い、その回答を自らの思想として提示するほかない。」［合田・大塚　一九九五：二〇八］

杉島氏は、これがリアリズムの放逐なのだと言う。確かに、二十世紀の文化人類学が掲げてきた民族誌的リアリズムを維持することはもはやできないであろう。しかし、そのことがリアリズムそのものの放逐につながると自動的に言えるわけではない。

杉島氏は、民族誌的研究ないしフィールドワークの意義を研究者個人が自分のおかれた状況との関連で問い直す中から新たなパラダイムが生まれてくるだろうと予言する。だが、「どのような思想的営為がそれにふさわしいかを見通すことはできない。」［合田・大塚　一九九五：二〇八］さらには、「苛酷な土地をよろめきながら進む」（グッドマン）ほかないとまで言う。

本当に、彼の言うような試行錯誤しか道はないのであろうか。もちろん筆者は試行錯誤の努力が惜しくてこういうのではない。民族誌的リアリズムに代わる方法を模索するとき、反リアリズムの立場に立つよりもむしろ、リアリズムそのものを再考することによって

道を切り開くべきではないかと考えるのである。

このことは、蓮見重彦氏の「倒錯的戦略」[蓮見　一九八五（一九七九）：一四七－一八四]を念頭に置くとき、不可欠の態度となる。蓮見氏のこの評論は無論文学を批評するためのものだが、それを杉島氏の議論にパラフレーズしてみると次のようになる。

蓮見氏の言い方を借りれば、杉島氏は、民族誌的リアリズムは「罠」だと言っていることになる。実際は「罠」であるかどうか疑わしいのだが、杉島氏はそのありもしない罠に向かって自分だけは罠にはまるまいと身構える。しかし、皮肉なことに「罠」であるとされた物語＝リアリズムの中に、それを否定する論理もすっぽり収まってしまうのである。それが証拠に、杉島氏は、文化人類学者の「単声的権威」を否定すると言いながら、その後に研究者個人の置かれた状況との関連づけのうえでの思想的営為を認めている点でそれを否定し切れていない。ここで思索を巡らせているのは結局、文化人類学者ただ一人なのである。「単声的権威」を否定するというのなら、例えば〈臨床の知〉が掲げるように〈関係の相互性〉に触れなければならない。そうした形で、調査者と調査を受ける側との非対称を見直していかなければならないはずである。

もっとも、この、民族誌を記述する側の「権威」を否定するということに関しては微妙な問題がある。なぜなら、権威を否定することによって、記述に対する責任もまた曖昧になる恐れがあるからである。この点について、ギアツは『作品と生』の中で、「著者であるという重荷は逃れようがない。それがどんなに重みを増したとしても、『方法』や『言語』や…あるいは共著者として再描写された…『ひとびと自身』へと転嫁させることはできない」[Geertz 1988：一四〇]と述べている。

杉島氏はリアリズムの放逐を掲げながら、それを議論のうえですら徹底していない。しかも、このことは、氏がこの論文の前段で「ポストモダニスト」たちの議論はリアリズムの引力圏から離脱しているとはいいがたい」[合田・大塚　一九九五：二〇五]と断じているだけに、余計に大きな矛盾である。

蓮見氏は、「物語は勝利する」と断言し、反リアリズムを退ける。反リアリズムはひそかにリアリズムに後ろから加担し、それを強化するだけなのだ。正当性をもつはずの批判が、陳腐なリアリズムに敗れ去る。それならば、われわれとしては「倒錯的戦略」をとろうではないか、と蓮見氏は主張するのである。

ここでの議論に好都合なことに、蓮見氏はこの批評の中で、中村氏の『哲学の現在』をとりあげている。この著書と『臨床の知とは何か』の間には十年以上の時間的な間隔があるが、二つの著書で中村氏自身の思想の根幹は大きく変わっていないと見てよい。少なくとも蓮見氏の批評に関する限り、何の変わりもない。したがって、以下の批評も基本的に〈臨床の知〉に対して当てはまると考えてよい。

中村氏は『哲学の現在』で、「歴史のうちで私たち人間によって無意識につくられた、目に見えない制度」が「意識的につくられた制度、目に見える制度に劣らず重要」であると言い、不可視なもの

への凝視の必要性を主張している。この不可視なものこそ、後の〈臨床の知〉にあたるものである。ここで、蓮見氏は、そうは言ってもなぜ不可視が可視から識別されなければならないのか、と問う。リアリズムが不可視について言及することこそ、その不徹底さの証しではないのか。リアリズムはなぜかいつも、この両者のはざまに引かれる境界線をそのまま肯定してしまい、はじめからこの線がいかなる力学に従って浮かび上がってくるのかを問題にしない。それが、リアリズムに対して（それを否定することを避けながらも）「倒錯的戦略」を採る理由なのである。

真に不可視のものがあるとすれば、それは、この捏造された境界線を信仰することがなくなった瞬間、それまで可視、不可視とされてきた諸々の制度の一切が見せ始める〈過剰〉のことであろう。それは、リアリズムが崩れさる瞬間でもあるが、同時により徹底したリアリズムへと更新されるプロセスの始まりでもあるはずである。

筆者は、文化人類学という学問に特徴的な営為－フィールドワークと民族誌記述を再考するための拠り所として、〈臨床の知〉をとりあげてみようと考えている。しかし、そのことは基本的な枠組みにおいてそれを肯定するということを必ずしも意味しない。既に述べてきたように、近代主義的な決定論的枠組みの意外な求心力の強さやリアリズムじたいの不徹底という障害を考えれば、そのことは容易に頷けることと思う。むしろ、筆者が意図しているのは、少なくともこの二つの問題点（障害は他にもあるかもしれないが）に照らしながら、リアリズムを更新していくことである。〈更新〉とは、それをあくまで近代の枠組みの外部に置かない状態で、徹底していくことである。二つは一見互いに結びつかないことのようにも思えるが、不徹底なリアリズムがまさに近代主義の中から出てきたことを考えれば、決してつながりをもたないことではないだろう。

引用文献

Geertz, Clifford 1973. The Interpretation of Cultures, NY: Basic Books, Inc.

ギアツ、クリフォード（小泉潤二訳）一九九〇　『ヌガラー一九世紀バリの劇場国家』、東京：みすず書房（Negara: the theatre state in nineteenth-century Bali, New Jersey: Princeton University Press, 1980）

ギアーツ、クリフォード（梶原景昭、小泉潤二、山下晋司、山下淑美訳）一九九一　『ローカル・ノレッジー解釈人類学論集』、東京：岩波書店（Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology, NY: Basic Books, Inc., 1980）

Geertz, Clifford 1988. Works and Lives: The anthropologist as Author, Stanford, California: Stanford University Press.

蓮見重彦　一九八五（一九七九）『表層批評宣言』、東京：筑摩書房

河合隼雄　一九九三　『ブックガイド心理療法－河合隼雄が読む』、東京：日本評論社

Malinowski, Bronislaw 1954(1948). Magic, Science, Religion

and other essays, Garden City, NY: Doubleday Anchor Books.
中村雄二郎　一九九二　『臨床の知とは何か』、東京：岩波書店
日本民族学会　一九九五　『民族学研究』第60巻別冊、フォーラム、学会名称変更提案関連資料Ⅱ、東京：日本民族学会
佐藤郁哉　一九九二　『フィールドワーク―書を持って街へ出よう』、東京：新曜社

Fieldwork —— knowledge as the clinical

Iwane TAKAHASHI

One of the problems which cultural anthropology hold at present is the question to《ethnographic realism》. Recent arguments on this matter tend to completely deny it and replace it with another method, especially with the interpretive method. Though their attempts have began in the decade before, the denial of realism has not yet been thorough. Certainly, I agree with them in that it is impossible to maintain the so-called《ethnographic realism》, but the right way is not the denying of realism itself but the renewing it in reference to at least the following two conditions. One of them is problem of locating ethnography in the modernist framework of knowledge which continues to remain in the social sciences concentrating on the macro-level analyses (that is, those except cultural anthropology), and the other is the "perverse strategy" (by Shigehiko Hasumi) which never denies realism but keeps questioning how it has come to generate.

Key Words

knowledge as the clinical
the modernist framework of knowledge
ethnographic realism
the perverse strategy
'renewal' of realism